

基本方針		令和6年度達成目標		成果と課題(評価指標の結果も含めた成果、分析、評価、課題、対応)											
東京文化会館の基本方針は、以下のとおりである。 【スローガン】 より多くの人々に集い親しまれる劇場へ ～「音楽・舞台芸術の殿堂」＝響きあう感動をあらゆる人々と～ 開場以来60年間、「音楽・舞台芸術の殿堂」として多くの人々が当館を訪れ、愛され親しまれている。さらに、令和3年度からの指定管理期間では、培った制作力や国内外とのネットワークを生かした高い芸術性を担保しつつ、社会的課題にも取り組みながら、幅広く鑑賞の機会や若手の輩出、学びや体験の機会を提供し、あらゆる人々が感動を分かち合える劇場を目指す。 【ステイトメント】 ○「音楽の入口体験から本格鑑賞・演奏への橋渡し」 高水準の舞台芸術を鑑賞されるお客様を大切にしつつ、音楽・舞台芸術の素晴らしさをより多くの方々に味わっていただく。 ○「参加交流」できる「広場」となり、「社会包摂」のための「居場所」となる 乳幼児から青少年、子育て世代、高齢者までのあらゆる世代、障害者、外国人等、様々な個性を有する方々のための拠点となる。 【方針】 ① 「音楽・舞台芸術の殿堂」たる良質な公演の鑑賞機会を提供する。 ② 全国の文化施設をけん引する先駆的な自主事業を展開する。 ③ 建物の魅力を生かしつつ、あらゆる人々が利用しやすい施設管理、機能更新を行う。 【取組】 ① 自主事業の積極的な展開 運動する創造発信、教育普及、人材育成の3本柱による自主事業の展開と国内外に向けた成果の還元 ② 貸館運営 戦略的な施設の貸出による世界最高水準の公演の提供、貸館公演との連携・協力による公益事業の実施 ③ 音楽資料室の運営 ④ 総合的な機能・魅力を発信する館運営 安全・安心の施設管理と舞台運営、バリアフリー・ユニバーサル化の推進、多言語化の推進、外部資金の導入、戦略的広報の取組、館の魅力の発信力強化・充実、地域連携の取組、職員の育成・スキルアップ		音楽・舞台芸術の創造・発信 1 舞台芸術の創造発信拠点として、既成の枠にとらわれず、新たな可能性を探求した作品を創造し発信する。国内外の一流の演出家や作曲家、出演者等との協働や国内外の劇場との連携を図り、質の高い創造とともに、新たな顧客の開拓、全国への幅広い成果の還元を図る。 <table><tr><td>評価指標</td><td>オンライン・プログラム制作件数・アクセス件数 創造発信事業への初来館者数・25歳以下の割合</td></tr></table> 新進音楽家等の専門人材の育成・支援 2 「東京音楽コンクール」を一層充実させ、世界で活躍可能な才能を持つ新進・若手音楽家を発掘、主催事業に起用し、演奏機会を提供する等の支援を行い、芸術性・社会性を備えた芸術家へと育成していく。また、アートマネジメント人材や、教育普及プログラムを牽引するワークショップリーダーなど、制作や事業運営を支える専門人材の育成も進めていく。 <table><tr><td>評価指標</td><td>各事業への東京音楽コンクール入賞者等の起用数</td></tr></table> 次世代への音楽文化の継承と教育普及、社会包摂・社会的課題の解決に向けた取組の実施 3 子供たちに音楽や舞台の喜び体験を通じ、豊かな感性を育む一助としつつ、音楽文化の次代への継承を図る。 音楽への関心が低い層に対し、気軽に音楽・舞台芸術に触れる「入口体験」の機会を広く提供する。高齢者や障害者などに対し、豊かな感性やコミュニケーション、自己肯定感等を涵養し、生きる力を高める一助となるべく、手軽に音楽の楽しさを体験できる参加交流型のワークショップや、芸術家と直接触れ合うアウトリーチ活動等を積極的に実施する。 <table><tr><td>評価指標</td><td>オンライン・プログラム制作件数・アクセス件数 シアター・デビュー・プログラムへの参加児童・生徒数 障害者施設等の連携数</td></tr></table> 質の高い鑑賞機会の提供 4 国内外の最高水準の公演の誘致や自主事業の実施により、来場されるお客様に満足していただける公演ラインナップを提供する。実演団体等との公演日程調整等を的確・迅速に行い、継続した高い稼働率を目指す。特に大ホールは海外招聘公演が多く、社会情勢の影響を受けるため、想定外の事態にも対応できる貸出体制を整える。 また、施設設備のメンテナンスを万全にするとともに、配信を伴う公演形態への対応も含め確かな技術力とサービスで公演運営をサポートする。 <table><tr><td>評価指標</td><td>稼働率</td></tr></table> ホスピタリティの充実と安全対策の強化 5 誰にも優しく、安全安心な施設を目指し、バリアフリー化や手話を含む多言語対応の取組を着実に推進していくとともに、危機管理や基本的な感染症対策を徹底するなど、お客様への安全対策の強化を図っていく。また、スマートカルチャー事業を通じた館内ネットワークにより、利用者の利便性の向上を図る。 <table><tr><td>評価指標</td><td>ホスピタリティ向上のための取組</td></tr></table>		評価指標	オンライン・プログラム制作件数・アクセス件数 創造発信事業への初来館者数・25歳以下の割合	評価指標	各事業への東京音楽コンクール入賞者等の起用数	評価指標	オンライン・プログラム制作件数・アクセス件数 シアター・デビュー・プログラムへの参加児童・生徒数 障害者施設等の連携数	評価指標	稼働率	評価指標	ホスピタリティ向上のための取組	■舞台芸術創造事業『水車屋の美しい娘』・創作初演として実施。入場者数:434名(集客目標達成率92%)。『狂った一頁』・フェスティヴァル・ランタンボレルの一環として実施。来客者からは、高評価であったが(集客目標達成率48%)集客面では苦戦。 ■響の森(9月、1月)は、それぞれ1,188、2,167名の入場者となり、9月は目標に届かなかったが、ニューイヤールコンサートは売完に近い好調。 ■オペラBOX…入場者数は523名となり、目標値の104%となった。本年は別事業で同公演を立川で実施することとなり実質2公演の形態となったことで、出演者の経験値及び効率性の増加につながった。 オンライン・プログラム制作(収録)件数=2件、アクセス件数=0件 創造発信事業への初来館者数=11%、25歳以下の割合=4% ■音コン…弦楽、金管、声楽部門を開催し、426名が応募(最終的に15名が入賞入選)。若手音楽家の発掘に貢献。2次予選以降は公開で2,177名の聴衆が来場。課題は、国際コンクールとしての認知度、国外参加者の回復・増加。 ■カーザ・ダムジカの来日時(7月、12月)を含め、通年でワークショップ・リーダー育成プログラムを実施。ポルトガルへの研修も実施し、一部WSでは、音コン入賞者も交えたプログラムも実施し育成成型に相応しい構築をした。 各事業への東京音楽コンクール入賞者等の起用数=延べ204人 ■「夏休み子ども音楽会」は大ホールでオケ公演を実施、2,081名の入場者となり、盛況であった。周辺施設へのパスポート参加者数も延べ3,069名に達した。 ■ワークショップ、アウトリーチは、予定通り、高品質な生の音楽体験を広く提供することができた。一般公開するWSでは、6,058名の参加者。 ■コンビビアル・プロジェクトはリラックス・パフォーマンスを小ホール公演として実施。また特別支援学校へのアウトリーチ、社会福祉施設へのアウトリーチなども予定通り実施している。 オンライン・プログラム制作件数=3件、アクセス件数=0件 シアター・デビュー・プログラムへの参加児童・学生数(U25)=197名 障害者施設(特支14校)・社会福祉施設(2施設)の連携数=16件 ■ブランド・ドミンゴススペシャルコンサート、英国ロイヤルオペラ、世界バレエフェスティバル、シュツットガルト・バレエ団などの公演が開催され、海外の最高水準の舞台鑑賞の場となった。 ■大ホール、小ホール共に安定して公演が開催されたが、空き日が生じた際は、利用団体と調整を図り利用に繋げ稼働率の維持・向上に努めた。 ■ホール利用団体はリピーターが多いが、初めて利用する団体には、丁寧にニーズを聞き取り事前打合せを重ねて公演を安全円滑に開催できるようサポートに努めた。また、コロナ禍では控えていたが、公演時にホワイエを利用してアフタートークやワークショップなどのイベント開催を希望する主催者が増え、館内の他施設へ影響が及ばないようにホールの利用調整などを適切に行った。 大ホール96%、小ホール85.2% ■視覚・聴覚障害者への情報サポートを推進するため、触知模型を作成し、前年度に製作した触知図を含む点字ガイドブックとともに運用を開始するなど、アクセシビリティの向上を図るとともに、多様性や社会共生の観点から、誰でもわかりやすい「やさしい日本語版」の館パンフレットを作成し配布を開始した。また、館内のWi-Fi等ネットワークを活用し、各窓口にタブレットを設置し、遠隔手話通訳サービス等の運用を開始した。(館パンフレットは3月14日より配布、触知模型は3月25日より運用開始) ■非常時にも備えるため、やさしい日本語を使用した災害時の案内チラシやサイン旗を作成し、実際に防災訓練で使用をした。 情報セキュリティに関する研修:1件 アクセシビリティ向上に関する研修:2件	
評価指標	オンライン・プログラム制作件数・アクセス件数 創造発信事業への初来館者数・25歳以下の割合														
評価指標	各事業への東京音楽コンクール入賞者等の起用数														
評価指標	オンライン・プログラム制作件数・アクセス件数 シアター・デビュー・プログラムへの参加児童・生徒数 障害者施設等の連携数														
評価指標	稼働率														
評価指標	ホスピタリティ向上のための取組														
		総合的な所見(自己評価の総評)													
■大規模改修に伴う全館休館のお知らせを9月27日付けで公表。休館期間は令和8年5月7日から令和10年度中を予定している。昨年に引き続き、大規模改修工事に向け、都、財団総務部及び委託先設計事務所と、設計に係る協議を進めており、全面的な設備機器更新などを通し、誰もが訪れやすい音楽ホールの形成に努めていく。本改修工事については、様々なメディアで取り上げられ、多くの関心が向けられた。 ■日々の施設設備のメンテナンス及び月2回の保守点検を通じて、施設の維持管理を適切に行い、継続して快適なホール環境を提供した。危機管理面においては、1回目の自衛消防訓練では、令和2年度以来となる災害図上訓練を実施。各地区でグループに分かれ、一斉に訓練を進行することにより、他の部署の動きを確認しながら、職員及び各館内事業者の役割等を改めて周知することができた。2回目の訓練では、やさしい日本語を使用した災害時の案内チラシやサイン旗を実際に使用した。 ■貸館公演においては、国内アーティストの公演が安定して開催されており、また、海外公演に関しては、英国ロイヤルオペラや世界バレエフェスティバル、ブランド・ドミンゴススペシャルコンサートなど、継続して世界最高水準の鑑賞機会を提供している。毎年恒例である「東京・春・音楽祭」では、20周年記念公演として、ワーグナー『ニーベルングの指環』ガラ・コンサートや、東京春祭としては11年ぶりとなるバレエ公演が開催されるなど、引き続き“音楽・舞台芸術の殿堂”として、多くの人々へ芸術性の高い公演を展開してゆく。 ■主催事業では、創造発信、人材育成、教育普及の3本柱を通し多様な事業を展開。メディアや登録者向けにメールマガジンを適時配信するとともに、ウェブサイトの更新は、ほぼ即時で英訳対応し、英語版公演カレンダーも月1回発行した。今年度からの新しい取り組みとして、11月下旬から12月にかけて「フェスティヴァル・ランタンボレル ～時代を超える音楽～」を立ち上げ、当館音楽監督・野平一郎プロデュースのもと、レ・ヴォルク音楽祭やIRCAMと連携し、幅広い事業を展開。無声音楽と電子音楽のコラボレーションなど、時代を超えた多彩なプログラムを通し観客を魅了した。東京音楽コンクールには、海外からの申込が大幅に増え、レベルの高い出場者が集まった。また、初めての試みとして、ネクスト・クリエイション・プログラムと銘打ち、多摩地区にて「オペラをつくろう!」を実施。お仕事体験など参加型のプログラムを通し、こどもたちの自主性や創造性を育むことに寄与した。加えて、コロナ禍で中止としていたティータイムコンサートが今年度より再開となり、新たな音楽ファンを開拓する機会を提供。全体として、魅力ある自主事業を通し、全国を牽引する文化施設としての役割を果たした。 ■今年開催のデプリンピックに向け、前年度に引き続き、財団として、あらゆる人が文化芸術を楽しむ環境を整備する「ウェルカムプロジェクト」を本年度も推進。3か年にわたる計画の2年目となる本年度は、公演や展覧会への鑑賞や参加を豊かにするための「鑑賞サポート」を実施。やさしい日本語を使用した災害時の案内チラシを作成したほか、タブレットによる遠隔手話通訳サービスや、点字ガイドブックの運用を開始。館内および、ウェブサイトにおけるアクセシビリティの向上を図った。 ■昨年度に引き続き、上野公園内の文化機関が連携し教育普及活動を行う「Museum Start あいうえの」の企画事業に参画し、上野地域全体の活性化に貢献した。加えて、財団連携事業では、都立文化施設を親子で巡るアート体験型イベントに協力し、こどものミュージアム体験に寄与するとともに、館の魅力発信にも繋げた。 ■音楽資料室においては、今年度より1階エントランスでの資料展示に加えて、4階音楽資料室のカウンター前に展示関連図書を集めたコーナーを新設し、新たな客層の確保に努めた。また、視覚支援機器や読書補助機の導入を開始し、障害の有無に関わらずあらゆる人々が、快適な資料収集ができる環境を整備している。利用者数は108%を達成し、都民の“音楽の入口体験”を支援する、音楽専門資料室としての機能を果たしている。															
外部評価 評価結果		総合的な意見(総評)													
A		■創造発信、人材育成、教育普及の3本柱の主催事業が、それぞれコンセプトも内容も非常に高いレベルで実現されており、東京文化会館のブランディングとして良い成果をあげていると思う。特に、野平一郎監督による新しい音楽祭「ランタンボレル」は、別予算がついていない中で、既存のシリーズ公演をテーマ的に紐付けするなど、大変うまく工夫されている。東京音楽コンクールには、国外特にアジア圏からの出場者が増えたことは喜ばしい。多摩地区での「オペラを作ろう」は、子どもたちをスタッフの一員とする「参加型」の仕組みによって、次世代育成ならびに広報面での効果も上がったのではないかと。ぜひ他の地区でも展開してほしい。音楽資料室は、カウンター前に展示関連図書を集めたコーナーを設置したことが、新しい客層の獲得につながった。今後、膨大な資料のDX化には大変な努力がかかると思惟されるが、長期休館中に外部に向けて発信できる重要なアイテムとなり得るので、可能な限り早く環境整備を進められたらと願っている。大ホールや小ホールの「触地図」の制作・公開、サイン旗の作成など、障がい者向けの情報サポートが、より幅広い客層へ劇場のユニバーサルな魅力をアピールすることにもつながっている。また、ホールの稼働率はコロナ前に戻りつつあるものの、来館者数があと一歩足りないというデータは、コンサートの内容や広報に原因があるというより、コンサート受容の多様化に伴うもので、多くの劇場が抱える悩みだと思う。世界情勢の激しい変化により、長期休館後の音楽芸術の世界はおそらく今とはまるで違うものになっていると予想されるが、休館を良いタイミングととらえて、さまざまな旧来の仕組みを入れ替えて刷新する好機となりますように。 ■大規模改修に伴う全館休館が目玉されているのは、これまで多くの名演を生んできた舞台芸術の殿堂の活動が一旦完全に休止してしまうこと、さらに都内複数の会場で同様のことが起きることへの懸念がそうさせているものと考えます。そうした中で、価格が高騰する一方の改修費用と対応必須事項とのバランスをいかにとっていくのかという点の好事例となるよう、東京都との連携をしっかりとりながら、対応していただければと願っております。都内、全国の会館、都内各地域の教育委員会、社会福祉関係組織、上野地区の他組織など、各関係機関との連携強化に努めておられます。改修時を見越した活動となっていて、都や日本を代表する館として、連携をつうじた会館運営のあり方の工夫につなげていただければと考えます。主催事業の多角化は、同時に組織内の人的体制とのバランスもとったうえで取り組んでいただければと考えます。東京音楽コンクールの実施と入賞者の活動機会の確保は、コンクール運営を館が実施していく理由でもあり、極めて望ましいあり方だと考えられます。コンクールを人材育成の機会と捉えて、さらにアーティストとの関係性を主催事業に活かしていくのは、創造型の会館が実施するコンクールならではの手法であり、創造発信力の強化にもつながっています。新音楽監督の就任による事業展開の新機軸がしっかりと見えてきました。芸術系大学などとの連携などにも注力していただき、一層注目度をアップしていくことを望みます。 ■東京文化会館に求められる役割は時代と共に変質してきたのかと思われる。特に平成前期からはそうであろう。昭和から平成の変わり目の頃までは、芸術の位置づけやその中身の高低、あるいは市民に求められる教養の質というものについては、日本の社会にある程度のコンセンサスが保たれていて、クラシック音楽等の価値も一般に高く評価されていた。それが、経済合理性の尺度と合致せぬところがあったとしても、それが芸術的に高いクオリティと意味を持つと認知されればやること自体に意味があるのであるから、赤字はしかるべきところか補填して当然である、あるいは別の入りの良い催事の黒字によって相殺すれば無問題である。ということで話が済んでいた面が多分にあったであろう。しかし、昭和末期からすでに進んでいて平成の初期から加速した。価値観の多様化、文化相対主義が、クラシック音楽の特権性を弱めていった。また高度成長が終わったことで、文化芸術に分配される資金が、単純に減ったとはいえないが、年々シビアになってゆき、損得勘定が重視されるに至った。中身の価値で評価することが価値観の多様化に伴って困難になれば、皆が納得する評価軸は、金額や人数や、社会的効用といった経済的物差ししか残らない。このような時代の転換の意味は歴史や思想の問題として深く問われるべきであるが、それは長いスパンで考えるほかは、とにかく公共ホールは存在の価値を毎年の事業によって主張するしかない。その点、東京文化会館の事業の質と量と広さは時代の変化に巧みに対応しており、令和6年度においても刮目すべき成果を示している。受け手は限られるが現代の芸術の先端を切り開く意欲に満ちた、ということは経済の尺度では評価が落ちるかもしれない、その意味で際どい領域から、間口を広くしての啓蒙的領域まで、限られた予算であるにもかかわらず極限的な目配りがきいている。もちろん立地の良さ、大小ともにホールとしての性能の高さ、それから歴史的信用が相まって、貸館としても十二分の魅力を備え続けている。改修のための長い休館が迫っており、その影響が懸念されるところでもあるが、休館中でも可能な事業を最大限継続していただき、休館の長い時間を活用して、さらに激変してゆくだろう時代環境の変化を見据えて見直すべきことは見直し、対応力を高めて頂いて、東京文化会館の歴史と伝統が未来に伸びてゆくことを祈念している。 ■60年間にわたる東京文化会館の存在の大きさに驚愕すると共に、その事業価値をますます高めている関係者皆様のご努力に敬意を表したいと思います。素晴らしいスローガン、ステートメントに基づき、方針、取り組みが適切かつ精力的に実行され、その実を上げています。いよいよ大改修まで1年余となります。この1年が次への飛躍の前兆になるようなものであることを期待しています。													

基本方針						令和6年度達成目標		成果と課題（評価指標の結果も含めた成果、分析、評価、課題、対応）		
1 ミッション (1) 芸術文化の創造・発信の拠点 東京の音楽・舞台芸術を代表する顔として長期的な視点にたった作品創造と国内外への発信 (2) 人材育成の拠点 舞台芸術の現場をささえるプロフェッショナルの育成 (3) 教育普及の拠点 次代を担う子供たちへの本物の舞台芸術の伝達 (4) 賑わいの拠点 芸術の香りのする、誰にとっても楽しく賑わいのある空間の創出 2 基本方針 (1) 音楽・舞台芸術表現の可能性を探求する劇場 (2) 絶えまなく力強い創造活動を行い、それを魅せる劇場 (3) 若手アーティストに場所を提供し、共に創造発信を行う劇場 (4) 初めて舞台芸術に触れる子供や大人にも親しめる作品の創造の提供 (5) 誰もが自由に出入りでき、一流の文化・芸術の香りを持つ劇場 (6) 日常的に新しい発見に出逢うことができ、ワクワクする感性に働きかける劇場						重31	○音楽・舞台芸術表現の可能性を探求する劇場 国内外の良質なオーケストラ公演、質の高い演奏家によるリサイタルや、新演出オペラの国内共同制作など、未来の音楽シーンを創造する事業を開催する。 また、世界主要都市の劇場・フェスティバルとの提携、海外著名演出家との協働、共同制作や海外公演など国際的な取り組みを行う。現代日本を代表する優れた舞台作品を東京から発信する。			定着した「VSピアノシリーズ」、井上道義最後のオペラ「ラ・ボエーム」を森山開次が演出、国内共同制作として7都市の劇場で開催、全公演売空を記録。東京芸術祭では、ウイーン芸術祭の委嘱作品、岡田利規・藤倉大作曲「リピンブルームのメタモルフォーシス」の国際ツアーに加わった。NODA MAPの共催公演「正三角関係」はロンドン公演を成功させた。「母」「息子」連続上演ではフランスの実力派遣演出家ラディスラス・ショラーを招き、上質な舞台で評価を得た。
							評価指標	音楽界・舞台芸術界での評価（公演評での高評価など）、オンライン・プログラム制作件数・アクセス件数	マンハイム国立劇場WSレクチャー、「芸劇まちがく」などオンラインプログラム7本実施、「母」「息子」が新聞4紙、「三人吉三」は1紙、ダンス公演が業界2誌にて高評価を獲得。	
						2	○国内外の劇場・音楽堂との交流を活性化し、国際的な舞台芸術の拠点となる劇場 「東京文化戦略2030」における海外発信プロジェクトを推進するため、国内外の大都市劇場と交流する共同事業の実施、国際共同制作の実施、当館事業の海外公演による発信を行う。また、休館期間中にも海外や国内でのツアー公演を実施し、東京都公立文化施設協議会の活用による区市町村と都の協業を推進する。			「母」「息子」は国内8都市、「三人吉三」は国内3都市、「ラ・ボエーム」は国内7都市の公共劇場での公演を実施、ネットワークを強化。休館期間は、職員をアメリカ、イギリス、ドイツ、カナダ、香港、台湾、ソウルなどの国際フェスティバルに派遣し、劇場同士の連携等の下地を作り、次年度ルーマニアのシビウ国際演劇祭との共同制作の東欧6都市公演が決定した。フィルハーモニー・ド・パリ教育プログラム責任者との交流を実施した。
							評価指標	国内・国際的共同制作事業数、海外公演の入場者数、海外ホールとの提携数、地方公演の本数・公演回数	国内共同制作1件、NODA MAP共催ロンドン公演4回で5,839人動員。フィルハーモニー・ド・パリとの提携継続、演劇自主事業3本の地方公演数23回。	
						3	○若手アーティストや芸術の担い手を育成し、共に創造発信を行う劇場 東京芸術劇場の音楽家育成事業、演劇人育成事業の充実を図り、休館期間中も活動を継続する。 研修コース、レクチャー、セミナー、他団体との連携を通じ、実演家、制作・舞台技術・マネジメント等の専門人材を育成し、担い手育成プロジェクトを推進する。			芸劇舞台芸術アカデミーによる制作人材の育成、オーケストラ・アカデミー・フォー・ウインド（GOA）、東京演劇道場に加え、本年度は文化庁が3年計画で実施する「クリエイター等育成・文化施設高付加価値化支援事業」に採択され、海外に発信できるアート・クリエイター5名、インハウススタッフ6名、映像スタッフ4名を選抜して、育成に着手した。
							評価指標	芸劇eyes・若手提携事業の劇団参加数、TACT、サラダ音楽祭及び自主事業全般における若手アーティスト参加数、GOAの依頼演奏数、人材育成事業からの劇場・オーケストラ等プロ組織への就職の人数	eyes系1団体、若手提携3団体が参加。若手アーティスト参加は、GOAがTACTに10人、サラダに10人、演劇系TACTに8人。GOAの依頼演奏数15件。制作人材1名、GOA2名が劇場・オーケストラに就職。	
						重14	○初めて舞台芸術に触れる子供や大人にも親しめる作品の創造の提供 多様な舞台作品の魅力を味わってもらえるよう、フェスティバルなどの多彩なプログラムを展開するほか、本物の舞台芸術に初めて触れる来館者も楽しめる工夫をする。また、劇場ツアーを定期的に実施して、舞台芸術の楽しさ、奥深さを伝え、芸術文化を身近なものにする。			サラダ音楽祭、TACT FESTIVALと多彩なプログラムを実施。TACTでは、音楽、ダンス、落語、影絵など多彩な演目をそろえ三世代が共に舞台芸術を楽しむ機会を創出した。劇場ツアーは、330人が参加、初めての参加者20％、満足度96.7％と芸劇の人気プログラムとして定着。「集まれ！池袋みんなの大道芸」は、10,000人を超える参加となり、「チャレンジ広場」には453名の子供たちが参加するなど、芸術文化を身近にする取組を推進した。
							評価指標	ファミリー向けフェスティバルの演目数、はじめて来館した人数・満足度、子供・若者の参加率、満足度、劇場ツアー・バックステージツアー参加者数、満足度	25演目（子芸1、ふれあい19、芸能体験ひろば5）、TACT計5演目（影絵、ワンファミ、街角LIVE、ダンス、落語）、劇場ツアー・BSツアー参加者数：330人満足度：96.7%	
						重25	○誰もが芸術文化に触れ、共生社会を目指す劇場 芸術の多様性が、コミュニケーション能力の向上に効果的であることを活かして、年齢、障害の有無、国籍等属性を問わず誰もが芸術文化に触れることで、高齢化や共生社会など東京の社会課題の解決に向けた「クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー」を推進していく。			「のほら表現部」は指導者育成に重点をシフト、音楽分野のインクルーシブWSは、芸術性の高い演奏会の開催につなげた。社会共生セミナーは、「鑑賞サポート」「開かれた劇場とは」をテーマに開催。参加者の満足度90.7％。多文化共生社会において異文化間の対話から演劇を立ち上げるための創作トレーニング・プログラム（TBTP）で作られた企画は、次年度、ワークインプログレスに繋げていくなど、クリエイティブ事業を推進した。
							評価指標	社会共生事業・鑑賞サポート事業・多文化共生・人材育成系事業の件数及び参加者数、満足度	鑑賞サポート：17回、参加者数136名 TBTP 13名（全講座参加者）＋131名（一般公開講座）満足度：一般公開講座 86.2％	
						6	○誰もが自由に出入りでき、一流の文化・芸術の香りを持つ劇場 芸術愛好家を満足させる質の高い舞台芸術を提供することに加え、幅広い層に訴求するプログラムを用意する戦略的貸館を実践し、首都圏に数多く存在する実力ある劇団や楽団・制作団体との共催・提携公演を実施できる劇場にする。また、劇場内で行われている公演についてレクチャーや楽しみ方のサポート（コンシェルジュ）をする。			音楽は共催の読響土日マチネー10回、提携9回。演劇は、共催5本、提携4本。芸フェスでは多ジャンルを低料金で提供。「母」「息子」「三人吉三」などの質の高い自主事業で評価を得るとともに、NODA MAP、ホリプロ、イクウム等との共催により話題作をラインナップし賑わいを創出。中堅・若手の注目劇団との提携、さまーずなど演劇ファンにとどまらぬ客層にアピールするアーティストの貸館を展開し、アフタートークを多数実施した。
							評価指標	稼働率及び入場者総数、共催・提携公演の本数、各種演劇賞の獲得、劇場ツアー・バックステージツアー参加者数、満足度	稼働率は基準値を達成。共催15公演、提携13公演。「息子」出演者 紀伊国屋演劇賞個人賞、共催イクウム 読売演劇賞最優秀演出家、悲劇喜劇賞受賞など。	
						7	○日常的に新しい発見に出逢うことができ、ワクワクする感性に働きかける劇場 劇場前広場やアトリウム、ロワー広場を活用して賑わいを創出し、将来的に地域とも連携してマルシェ（市場）の創生を目指すとともに、館の事業全体の効果的な広報展開により劇場のプレゼンスを高めていく。地元池袋西口の教育機関である立教大学や、地元自治体の豊島区との連携事業を展開し、さらに休館期間もSNSを活用した発信を行い地域での劇場の存在感をアピールするなど、開かれた空間を創出する。			地域団体との共催で、池袋モナルパルナス回遊美術館、東京フラフェスタ in 池袋、ふくろ祭り・東京よさこいなどを実施。また、劇場を複合的に利用したフェスティバル開催時には、劇場前広場、グローバルリングと連携し賑わいを創出した。X（旧Twitter）フォロワー数は全国公共劇場の中でも最上位をキープ。休館中は、人材育成や社会共生事業などに重点をおいてSNSを発信し、劇場のプレゼンスを堅持した。
							評価指標	劇場のX（旧ツイッター）のフォロワー数、YouTube芸劇チャンネル登録者数、地域との連携事業数、休館期間におけるSNS等による情報発信	X（旧ツイッター）のフォロワー数：103,440、YouTube芸劇チャンネル登録者数：5,290、地域との共催事業数3事業	
						8				
							評価指標			
総合的な所見（自己評価の総評）										
10月から工事休館に入ったため、公演事業は9月までに集中して実施、通年でやっている人材育成事業や一部公演は休館に入ってから豊島区の施設等、外の会場を利用して行い、計画していた事業はすべて予定どおり実施した。文化庁の「総合支援」が復活したこともあり、収支相償を達成した。休館中に、これまでできなかったスタッフの他館や海外への研修を実施。バックオフィスを担う職員も含めて、特に若手職員は大いに刺激を受け、今後の企画や運営に生かし始めている。また、文化庁の新たな助成金「文化施設高付加価値化支援事業」に採択され、今年度から3年間、音楽・演劇・映像分野の若手クリエイターと芸劇のインハウススタッフ（プロデューサーと舞台技術）の育成、海外公演を目指した国内での公演制作、映像での記録と発信を行う。今年度は、クリエイター、スタッフの選抜、海外リサーチを実施した。コロナ禍で中断していた国際交流を復活し海外公演を実現していくきっかけになると考えている。また、財団全体で新人人材育成方針が策定され、これまでの「事務」「学芸」に加えて、「舞台制作」「舞台技術」の専門職種ができたことは画期的なことであり、さらに、この制度を充実させていき、職員のモチベーションを高め、安定したサステナブルな劇場運営につなげていきたい。										

外部評価 評定結果		総括的な意見（総評）	
A		○前提として、劇場のミッションや基本方針を明確にしていることを評価する。休館中も予定していた事業をすべて実施し、収支相償を達成するなど、優れた運営手腕を発揮した。舞台作品の創造提供だけでなく、海外国内の劇場や演劇祭とのネットワークの促進、観客育成、人材育成、地域との連携等、さまざまな局面、さまざまな事業において目を見張る成果を挙げている。さらに、休館期間を利用して海外の国際フェスティバルとの関係を強化し、次年度以降の企画を周到に進行させている。文化庁の新たな助成金である「文化施設高付加価値化支援」も獲得し、クリエイター人材の育成にも着手。人材配置・人事政策では、財団内の新人事育成方針で新たに「舞台制作」「舞台技術」の専門職種が設けられたことは画期的である。特に、休館期間中の人材資源の活用充実による外部機関・団体との関係性の強化政策はどの公共劇場の運営にも参考となりうる優れた施策であると言える。	
	A：目標を十分に達成し、成果を上げている B：目標を概ね達成している C：目標を十分に達成しておらず、改善が必要である	○重点目標1、2、3とも一定の満足すべき水準までの達成を見たと思われる。その他目標1、2、3、6、7とも同様。ただし館内のレストラン、駐車場などについては未だ改善の余地があらうと思われる。当目標達成シートの「成果と課題」欄には「課題」が一切見られないが、劇場側から見た「課題」は無いのだろうか？ ○休館中ということで、地元に住むものとしては「芸劇」のプレゼンスがなくなって、さみしい期間だったが、この期間を活かして様々なことが行われたことがよくわかった。7月の再開館を楽しみにしている。 ○10月からの工事休館を予定して、様々な方法を講じて、計画していた事業をすべて実施し、かつ文化庁助成金も活用して収支相償を達成できたことは素晴らしい。芸劇ブランドの高い質と創造性を保障すべく企画された公演をはじめ、地域の賑わいや、数々の舞台芸術に関する人材育成プログラムが、各種目標を大幅に超えたことは、これまでの課題解決に努力した成果であると思う。また、休館中の時間を活用して、スタッフの他館や海外への研修を実施した効果は、職員たちにも影響を与えている様子である。新たな文化庁助成金「文化施設高付加価値化支援事業」に採択されたことは、財団の人材育成育成を進展することに繋がり、これまでの「事務」「学芸」に加えて、「舞台制作」「舞台技術」の専門職種ができたことで、更なる劇場運営の継続的発展が期待される。	